

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.49

平成27年3月31日

能楽を地域文化に

会長 馬場 洋一



横浜には横浜能楽堂という立派な能楽専門施設がある。横浜の「能・狂言の殿堂」である。掲げているコンセプトは「古典芸能の継承と再創造」「多角的な視点から能・狂言を問い直す」「能・狂言の敷居を低くする」「国際交流」の4つ。

能・狂言の公演を積極的に行う一方で、子供を対象とした能・狂言のワークショップや、手話通訳等を導入して障害を持つ方を対象とした「バリアフリー能」、舞台の裏側を見ることが出来る施設見学会など、能楽愛好者を増やすための様々な企画を積極的に行っている。「高

る日本の古典芸能のアーーツセンター」を目指す活動（横浜能楽堂HP）により、これまでに催花賞、芸術祭賞優秀賞などを受賞している。山崎有一郎名誉館長、中村雅之館長をはじめ、スタッフの「古典芸能の継承・発展」への熱意の賜物である。

一方、横浜市の各区には区民文化センターがあり、地域に根差した文化の発信施設を目指して様々な活動をしている。その一つ神奈川県民文化センター・かなつくホールでは、「温故知新塾」と題した伝統芸能に親しむ市民講座を主催している。今年2月、「能のIROHA」という講座が開催されたので見学してみた。喜多流の若手能楽師、友枝真也師・佐々木多門師・大島輝久師の3人で作る「燦ノ会」とホールとの共同企画である。30人の参加者のうち観能経験者は6人。「お能の『決まり事』を理解して観ると楽しみが倍增

しますよ」と観能の基本を懇切丁寧に解説してくれた。装束を着け、髪を結い、面を付けて見せる。装束の着方や色によってシテの女性の年齢が表現される。との解説に身を乗り出して聞き入り、初めて間近に見る紅白段唐織や縫箔、長絹の豪華さに、会場のあちこちからため息が漏れた。

燦ノ会は、日本各地で能の普及のためにこのような活動をしているそうである。

参加者の女性に話を聞いた。「能楽に初めて触れたのは去年の横浜五流能楽大会。五流競演の『羽衣』を聴き、お能に興味を持った。今日のワークショップでもっとハマりそう。次は何を観ようかな」彼女の知的好奇心が頭をもたげたようだ。

かなつくホール宇山友思館長の思いは「横浜能楽堂への橋渡し」ができればよい」とのこと。

横浜能楽堂、かなつくホール、燦ノ会、横浜能楽連盟の目論見は的中し、図らずも連携の構図が成立していた。横浜に能楽がより定着するために、各区の区民文化センターで「横浜能楽堂への橋渡し」の企画が多く実施されることを願いたい。「能の敷居」は一層低くなり、理解はより深まるだろう。「趣味として自分もやりたい」という人が増えれば、希望の光が射してくる。

連盟報告（26年度前期）

企画事業担当 青山 圭佑

一、「第62回横浜能」について

平成26年6月14日（土）、横浜能楽堂において、能「頼政」（喜多流・シテ栗谷能夫）狂言「寝音曲」（和泉流・野村万作）により開催されました。チケットは完売、来場者444名、来場率91・3%でした。

二、「第30回記念五流能楽大会」について

平成26年9月27日（土）、当番幹事喜多流及び海謡会により開催されました（別稿大会報告参照）。

三、平成26年度総会・役員改選について

第48号にて報告の通り平成26年4月22日（火）に総会が開催され、改選された新役員によって現在事業を展開しております。

四、今後の活動について

「第18回五流交流のつどい」は、平成27年3月14日（土）開催予定で、担当幹事金春流により準備が進められています。また能楽堂主催の「第63回横浜能」は平成27年6月20日（土）観世流「西王母」及び狂言にて開催予定です。

なお、会員の動向については平成27年度総会時点において把握し、次号にて報告いたします。

第30回記念「横浜五流能楽大会」を終えて

喜多流 大館 惺雄

平成26年9月27日（土）、横浜能楽堂において開催されました。番組総数は40番（素謡14・仕舞17・連吟6・独鼓3）で、出演者数は延べ275人でした。

各流派にお願いした番組の出演申込書は締切日までに全て届き、おかげでスムーズに番組編成作業に取りかかることができました。番組の初番とキリは当番流派の喜多流出雲会と海謡会が務め、各団体の出演希望時間を優先して組み立てました。

目玉の五流競演は、喜多流・観世流の連吟を始めと終わりに置き、4番の仕舞を間に入れて切れ目なく「競演」を鑑賞できるようにし、馬場新会長の挨拶は競演後にお願しました。

今回の競演曲「羽衣」は、三保の松原を含む富士山が世界遺産に登録されたこともあり、30回記念の祝賀の曲として取り上げたものです。「競演」というとワザの競い合いのような印象を受けますが、それだけではなく同一曲を五流並べて聴くと、同じ曲でも詞章の違いやフシの違い、仕舞の所作の違いがあることが理解できます。このことから「五流競演」は能楽の奥

の深さを体験できる、意義のある催しだと思います。

会は予定時間を少々オーバーして18時過ぎに終了しました。

今回、企画段階から当日の進行・運営に至るまで、実に多くの方々のご協力をいただきました。備品その他の用意にご配慮いただいた能楽堂の係の方々、細々した調整などにご尽力いただいた倉藤さんをはじめとする連盟事務局の方々、会場の設営から当日の進行運営に至るまで動いていただいた海謡会・洋謡会・出雲会・浜友会の方々に厚く御礼申し上げます。「力を合わせた」という気持ちの良い実感の残った大会でした。

古典芸能を若い人に

観世流 杉浦 佳子

能楽が世界に誇る我が国の宝であることはもちろんですが、それが将来もきちんと伝わっていくのかという点、決して楽観はできないのが現状だと考えます。とは言え、伝統は脈々と継承され、多くの能楽師の先生方はますます芸を磨いておられ、その点は何の問題もありません。問題は、それを鑑賞する側にあると思うのです。

私は高校の教員をしています。同僚も「高砂って何ですか？おめでたいのですか？」程度の意識ですし、生徒達は「ノウ？

何それ？」という有様です。日本全国でも「能」という言葉すら知らない人が増えているのではないのでしょうか。

どんなに素晴らしい芸能も、生きた肉体で表現する限り、鑑賞する人がいなければ命脈を保つことはできません。能楽が代々受け継がれてきたのも、その時代ごとの人々の支持があったからでしょう。具体的には、自らも稽古を積んで日常や人生の節目に謡い舞い、或いは演能を鑑賞し、能楽師にあこがれ、場合によっては後援し続けてきたからにはかなりません。

急激な時代の変化の中でも、大事なものを若い人達に伝えることを忘れてはいけないと思います。

そこで私も、高校教員という立場を活用して、昨年の秋勤務校で「能楽ワークショップ」を開催していただきました。私の所属する和謡会がご指導を仰ぐ坂井音隆先生・音晴先生にお越しいただき、1年生全員が体育館に集まり、授業の一環として『高砂』の謡等の指導を受け、代表者が簡単な舞の所作を体験してみろという内容です。両先生の仕舞の実演では、初めて見る所作の美しさ・凛々しさに、謡のご指導では朗々たる声の迫力に、多くの生徒が衝撃と感銘を受けたようでした。

もらうこと、そしてその魅力を「感じて」もらうこと……。祖先から受け継いだ「能楽」という宝物を未来に届けるために、できることから始めていきたいと思っています。



花は心、種は態なるべし

金春流 藤平 紀一郎

世阿弥の「花は心、種は態（わざ）なるべし」について、『花鏡』『風姿花伝』に関する書『道元と世阿弥』（西尾実著）を引用してひもといてみます。

「花は稽古によって開き、日々夜々、行住坐臥にこの心を忘れずして、定心につなぐべし」と言われる。そういう花を開く種は態（わざ）、謡等の所作である。それを反復稽古することが根底になってきた心を「花は心」と言う。その花を開く心というものは、こういう次元の

高い心である。世阿弥は、身にするわざ、すなわち「舞ひ・働きの主なるは心なり。正位なり」『花鏡』と書いている。「この心を忘れずして、定心につなぐべし」ということは、これは禅の修行だと言ってもよいのではなからうか。あるいは正念持續と言ってもよいのではないかと思う。その「正位」は、涅槃と超えた絶対の立場という意味もある。そのように考えてきて、世阿弥の稽古の極致とはどういうものであったかという点、私は、それは禅を根拠にしたものであると思う。

『風姿花伝』第三問答条の「能に花を知る事」の条に、「されば、花を知らんと思わば、まず種を知るべし。花は心、種は態（わざ）なるべし」とある。この立言において注目しなくてはならないのは、能の「花」は、舞や物まねのような「わざ」であるよりも、そういうわざの稽古によって成立する「心」であるということである。さらに言うところ、それは「わざ」の稽古を「種」として展開してくる「心」の「花」であるとしている点である。

一方、さらに付け加えると、『風姿花伝』の「花は心、種は態なるべし」は、「古人云わく」として、禅宗の六祖慧能の偈、心地に諸の種を含む

普き雨に 悉く皆萌す
頼に花の情を悟り

已りぬれば

菩提の果 自から成ず

を引いて、その註にしている。起句と承句が「わざ」の稽古を意味し、転句と結句が「菩提の果」としての「花」であることを示す引用である――

（註）『道元と世阿弥』西尾稔著

岩波書店・昭和40年11月刊行

古稀を過ぎての手習い「お太鼓」

観世流梅若会 中戸 史子

「七十歳で新しいことを始めると良い」との、聖路加国際病院の日野原先生の言葉に影響され、平成23年度の横浜能楽堂ワークショップ「初めての太鼓教室」を受講しました。

お太鼓は、他のお囃子とは違い、音は出ますが、考える暇もなく続けて打たねばならず、バチづかいも、時々かけるカケ声も、私には覚えられず、古稀を過ぎての手習いの大変さを感じるばかりでした。

それでも、10回の講座、発表会が終わつてみると、無性にお稽古を続けたくなり、数か月後には右足、その半年後には左足の関節の手術が控えておりまして、梶谷先生に入門をお願いいたしました。

お太鼓を始めて良かったことは、

- 1、術後のリハビリが身に付いたこと。
- 2、肩こりがなくなったこと。
- 3、リハビリのおかげで腹筋がつき、謡の声が出るようになったこと。
- 4、気持ちが前向きになったこと。

術後6か月で正座の許可もあり、1年間お休みしたお稽古を再開いたしました。昨年3月の桐英会に出させていただけたのは、本当に嬉しいことでした。今、私はお太鼓にすっかりはまっております。あせらず、ユックリユックリと、楽しみながら続けていくつもりです。

豊かな老後を過ごせる幸せ、金春流太鼓の梶谷先生に感謝です。そして横浜能楽堂の「初めての太鼓教室」にも…。

お酒が登場する謡曲

宝生流 吉田 澄夫

喉をカラカラにして謡い終えた後ビールをグイッ！酒好きにはたまりませんね。ところで謡には酒好きの霊獣が孝行息子に功德を施す「狸々」という曲があります。そこで、酔狂ながら酒が登場する謡を宝生流の謡本から拾ってみましょう。

「狸々」と同じ孝行息子の譚として有名なのが「養老」です。謡には酒という言葉は一切無く霊水の扱いですが、不老長寿の

霊水Ⅱ酒と容易に連想できます。同じく霊水が出てくる曲には、枕に書かれた経文を菊の葉に写して水に浮かべると不老不死の薬（即ち酒）となったという「枕慈童」があります。

鬼界が島に流された俊寛が水を酒と偽って酒盛りをする「俊寛」。盧生が天の濃漿（こんず）仙人の酒を飲み、栄耀華を極めた一炊の夢が描かれる「邯鄲」。隠棲している恵遠禪師を陶淵明と陸修静が訪れ、不老不死の薬の水（酒）を酌み交わす「三笑」。客僧に酒を勧めてかどわかされた我が子の舞姿を偲ぶ「木賊」も忘れ難い曲です。

また武人に関わる曲では、めでたい酒、辛い酒、悲しい酒と様々な酒を酌み交わす酒席が、重要な場面に使われています。関守が提供した酒を弁慶が快く受けて酒宴をなし、延年の舞を舞う「安宅」。母に勘当を許された時致が兄と母との親子水入らずで酒を酌み交わす「小袖曾我」。

頼朝が船で西国へ逃れる時、人数が不吉だと下船させられた土肥実平の子遠平が助けられ、親子再会して喜びの酒宴を張る「七騎落」。宇治の合戦で捕らえられた春栄が兄種直らの助命嘆願により赦免され、喜びの酒宴を催す「春栄」。一の谷の合戦で囚われの身となった平重衡の無聊を慰めるため、琵琶琴を携えた千手が訪れて酒を勧

める「千手」。領地を横領した藤栄が浦遊びの酒宴に興じていると、執権北条時頼が現れて散々に懲らしめられる「藤栄」。西国へ落ち行く義経が催した静御前との惜別の酒宴で烏帽子を着した静が舞いを舞う「船弁慶」。

現代人には理解しにくい心境ですが、主君満仲の子息を殺せとの命を受け、自分の子を生代りにした仲光が、主君が子息を許して酒宴となるも、そこに我が子のいない悲しみを拭い切れない「満仲」。夫を殺された妻と子が仇討行脚の途中で仇望月と出会い、酒を勧めて油断させた後に見事本懐を遂げる「望月」。

斬首される前夜に頼朝が同じ霊夢を見たために命を助けられた盛久が、酒宴を催されて盃を賜るが、頼朝の心変わりせぬうちに酒宴半ばに急いで退出してしまう「盛久」等々があります。（長文のため後半は次号に掲載）

謡跡を巡る「湯谷」

喜多流 加藤 圭志

仕舞を習い始めてから10年が過ぎ、稽古や舞台で観た曲の謡跡を訪ねてみたいと思うようになりました。横浜には六浦や放下僧の瀬戸があります。実家（静岡県掛川市）に帰る折、遠州の片田舎にも何か…と考えたのですが、小夜の中山の旧跡く

らいで、なかなか思い当たりません。片やお隣の駿河国には日本屈指のキラコンテンツ、富士を眺める三保の松原に羽衣の松があるというのに、これはこれで悔しい（静岡では西側と東側で仲が悪いとされています）。

そこで、記憶をたどり謡本を探してみたところ、「遠江の國池田の宿の長をば湯谷と申し候」という湯谷（他流では熊野）の記述を見つけました。曲の最後、湯谷が宗盛に暇をもらって東に下った先は、どうやら現在の磐田市池田のあたりだったようです。

帰省に合わせ国道1号線のパイパスを降りて走ること5分ほど、天竜川のほとりの住宅街の中に現在の行興寺があります。入り口には熊野旧跡の案内があり、門をくぐると広々と藤棚が続いていました。この寺は、謡曲にも出てくる湯谷の母が亡くなった後に、その菩提を弔うためにお堂を建てたのが始まりなのだそう、藤棚のうちの1本は湯谷お手植えとの言い伝えがあり、樹齢数百年の「熊野の長藤」として国の天然記念物に指定されています。藤に囲まれた廟の所に、湯谷と母の墓が仲良く並んでいました。どちらも700年ほど前に建てられたという、塔のような立派なお墓でした。母を想いながらも花見の牛車に乗せられていく場面では思

わず涙したこともありましたが、果たして母娘は無事に再会することができたのでしょうか。

お寺をぐるりと回ると反対側にも広々とした藤棚と、立派な能楽堂が建っています。湯谷の命日である5月3日に合わせてお祭りがあり、奉納新能も行われているとのことでした。

学生の頃はこういったことにあまり興味を持たないまま地元を離れてしまったので、新鮮な気分ですることができました。磐田市内には千寿の旧跡などもあるようで、春の花の季節に改めて訪ねてみたいと思います。

謡曲「六浦」と「青葉の楓」

金剛流 豊増 清明

謡曲「六浦」は、鎌倉・室町時代の武蔵国六浦庄（むつらのしょう）、称名寺を舞台としていた。ここでは、「六浦」の主題である「青葉の楓」について少しふれてみたい。

『六浦』は、金春座系の左阿弥の作と言われており、1450年頃の作品と思われる。

都から東国行脚の僧の一行が鎌倉を経て安房に渡るため、六浦に至り称名寺に立ち寄る。僧は、山々の紅葉が今を盛りと燃えているのに、本堂近くに紅葉せずに青葉のままの楓の木を見つけ、不審に思う。来合わせた里女に尋ねると、女は僧達に次

のように語る。「その昔（鎌倉時代後期、1320年頃か）冷泉為相卿が称名寺を訪れた時、お堂前の楓がその一本だけ、後ろの山の本々に先立つて紅葉していた。これを見た為相卿は、如何にしてこの一本に時雨けん山に先立つ庭のみみ葉々と一首の歌を詠じた。貴人の称赞に感じ入った楓は、功なり名遂げて身退くは天の道なり」という古語を信じ、以後は紅葉するのを止め、常盤木のように青葉のままになった」と。女は、本当は自分はこの楓の精だと言いつつ、秋草の中に消える。和歌と楓、仏縁と回向にまつわる、夢幻の世界の展開である。

僧達が見たこの楓は「青葉の楓」と呼ばれ、その後の文献・地誌類等にも紹介されて、江戸時代には「金沢の八銘木」の一つとして親しまれたようだ。

草木の精を擬人化する能の幽玄な世界に、浅はかな疑問を差し挟むのは無粋だが、現代人の我々には、貴人の褒め言葉で楓の生能が変わるとは考え難い。まず、早めの紅葉化であるが、これはこの木だけに起きた特異な病変だったのかもしれない。翌年から常緑の楓になってしまったというのも、やはりこの木の突然変異なのだろうか。その後この楓は、実態は不詳だが、代替わりしながら現代まで親しまれてきた。一時枯失した時期

もあったが、最近では平成17年、本堂右前の阿字池の畔に、文献等を参考に常盤楓が植樹されている。この楓も秋に黄変し落葉する種類であり、本州一帯に生息する楓で、紅葉か黄変かは別として紅葉も落葉もしない種類は現存しないようである。

二人の師に学んで

下懸宝生流 井上 祐成

下懸宝生流の謡は非常に力強く謡う。稽古を始めるときにはまず「大きな声を出して」と指導される。従って小さな声で謡うと「声が小さい」と叱られる。私は、それが『謡』というものであると思っていた。しかしある時、シテ方の流儀を習っている友人から「どうしてそんなに怒っているように大きな声で謡うのか」と質問され、愕然とした。そこで、宝生弥一先生にお尋ねしたところ、「シテ方の謡が柔らかく高い声で謡うのは、登場する人物が大部分女性あるいは化身であるからで、ワキ方は登場人物が現実の人間であり、また必ず男であるから、男らしさを強調して強く低い声で謡わなければならない。シテの柔らかく高い声とワキの強く低い声とが相まって、能は構成されている」と教えられた。ある本で『シテ方の名人と言われた二人がシテとワキを演じた能

が、シテが二人いるようでシツクリしなかった」と書かれているのを読んだことがあるが、納得できるような気がする。

私が弥一先生と出会ったのは昭和37年の夏、当時先生が都立駒込病院に出稽古にいられていた時である。謡を習い始めて最初に指導されたことは「大きな声で謡いなさい」ということであつた。また、先生から「早稲田にも稽古に行っているので君も来なさい」と言われ、翌年4月大学2年の時に稲謡会に入会し、卒業するまでダブルで稽古をしていた。その後昭和60年3月に先生が亡くなられたまでの20数年間、無我夢中で教えていただいた。弥一先生についての思い出は数え切れないが、昭和56年に先生が人間国宝に認定され、その記念として開かれた素謡会で「隅田川」の語りを独吟するようにと言われ稽古を始めたが、最初の「さても。去年三月一五日。や。しかも今日にて候よ」の「や」ができなくて何度もダメを出されたことが、今でも懐かしく思い出される。

そして、大学3年の秋、学生能の催しに『女郎花』のワキで出演した時にご指導をいただいたのが、現・第12世宗家、人間国宝の宝生閑先生である。弥一先生が亡くなられてからは、閑先生のご指導を受けて今日に至っているが、それも既に30年以上がたつ。今、閑先生は、「ワキの謡でも曲の登場人物をよく理解して謡い分けよ」と指導される。下懸宝生流の謡はますます難しい。

能楽堂だより

27年4～9月の公演案内

27年4月～9月の横浜能楽堂の公演予定は次の通りです。このほか、毎月第二日曜日に「横浜能楽堂普及公演」横浜狂言堂「」を開催いたします。

第63回横浜能

6月20日（土）午後2時開演
狂言「止動方角」

（和泉流）野村万蔵
能「西王母」（観世流）岡本房雄
S席四千元／A席三千五百円
／B席三千元

チケット発売日
3月7日（土）正午から

（初日は電話・Webのみ）
夏休み親子能楽ワンダーランド
8月8日（土）午後2時開演

狂言「柿山伏」
（大蔵流）山本則重
能「殺生石」（観世流）武田文志
おとなS席四千元／A席三千
五百円／B席三千元

こども／千五百円
※保護者はこどもと同数まで千
円引（お子様のお席をお求めに
ならない場合は適用されませ

ん。こどもは18歳以下が対象です。ご希望の方は電話か窓口にてお申込み下さい）
「体験しよう！」午前10時半から（こどもチケットご購入の方対象）
能・狂言の動きや能の楽器が体験できます。
（定員80名。要事前予約。先着順）
※親子でご来場下さい。

チケット発売日
5月9日（土）正午から

（初日は電話・Webのみ）
講座「梅若玄祥のスリーステップで学ぶ能」
9月19日（土）午前10時30分開演

ステップ1「源氏物語「夕顔巻」を学ぶ」三田村雅子（上智大学特任教授）
ステップ2「能「半部」の詞章を読む」馬場あき子（歌人）
ステップ3「能「半部」を知る――演者の視点から――」

梅若玄祥（シテ方観世流）
能「半部」（観世流）梅若玄祥
S席五千元／A席四千五百円
／B席四千元

チケット発売日
6月13日（土）正午から

（初日は電話・Webのみ）
横浜能楽連盟連絡先
◎事務局 倉藤
TEL〇四五―八三五―三六二
◎横浜能楽堂
TEL〇四五―二六三―三〇五〇

横浜能楽連盟連絡先

◎事務局 倉藤

TEL〇四五―八三五―三六二

◎横浜能楽堂

TEL〇四五―二六三―三〇五〇